
式神武装使いの転生記

ユング・フロイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

式神武装使いの転生記

【Nコード】

N9118N

【作者名】

ユング・フロイト

【あらすじ】

現実世界からGS美神極楽大作戦!!!の世界に転生した男が自分なりに面白く生きようとする物語。

第一話

僕の名は鬼道幽樹、所謂転生者だ。

前世の記憶を持って生まれた僕はびっくりしたよ。

なぜなら僕はこの世界を知っていた。

G S 美神極楽大作戦、神も悪魔も妖怪、幽霊も存在し、それを退治除霊するG Sとよばれる霊能力者美神令子を主人公とした漫画の世界だったからだ。

僕の鬼道という名字もこの世界に登場する鬼道政樹と呼ばれるキャラクターと同じものでまた何を隠そう、僕はその鬼道政樹の弟として生まれ変わっていたんだ。

正直なところ、せめて夜叉丸がほしかった。

僕が生まれて五年、正直なところどう生きようか迷っている。

肉体が陰陽師の家系のものだったからか、まだ力の大きさ自体は大了したものではないが霊力に目覚めている。

G Sを目指すべきなのだろうか、霊力を拳などに宿し戦う霊的格闘は出来るだろうが、それだけでうまくいけるような気はさすがにしない、マンガの世界に生まれ変わったとはいえ原作に介入しないといけないわけではない、それに力を持たない者が入り込んでもはっきり言って死んでしまうだけだ。

それは嫌だ。かといってせっかくの二度目の人生なのだ、この世界の特色でもあるオカルトに関わり生きたいとも思う。

やはり、ある程度の力がほしいといま一度思う。せめて夜叉丸がほしかった。

しかしそんな僕にも転機が訪れた。

鬼道家の庭にあるもう使われていない古井戸に、足を滑らして落ちてしまったんだ。

運よく大した怪我もなかったんだが、どうやって出ようか辺りを触っているときに偶然にも隠し部屋を発見し、そこには古びた本が一冊安置されていた。

題名は「百鬼道集」ひゃくきどうしゅうそこには今はもう失伝されたとされる道術などがいくつも記されていた。

それを読んだ時僕は歓喜に打ち震えた。

これはもはや僕にGSになれという、何かのお告げなのかもしれない。

井戸から助けられて三日、気付かれないように隠し持っていた「百鬼道集」その中でも、僕は幾つかの術に注目した。

一つは、封魔の術。

これ自体ははっきり言って市販されている吸引札と大した差は無い。だがもう一つの、転魔の術。

これは封印した妖魔を式神へと変えることができる。

これだけでも十分すごいと思うが、

さらに、装魔の術。

これは転魔の術により造り上げた式神を武器の姿へと変え、その能力の方向性を定めることにより元となった妖魔の力を最大限発揮させ操る。

三つの術を合わせて、「封魔転身装甲の術」とそう呼ばれている。

この術は元々、夜叉丸の為の術らしい。夜叉丸は単体でも優れた式神だが、特別な能力を持つわけでもない、故に封魔転身装甲の術により造り上げた武器を夜叉丸に装備させることによりあらゆる状況に適応させるためだそうだ。

この術によって造られた式神は次代に継承される事は無く、代々の当主がその時代に合った新しい式神を造り出していった。しかしいつからかその術は伝えられることも無くなってしまったのだろう。

この術で作り出した武装は人間にも操る事が出来る。

僕はこの術を用いてGSへの道を進もうと思う

とはいってもまずは修業、肉体霊力共にある程度鍛えなければ第一段階の封魔の術もおぼつかないだろう。

そういうことで家族達に隠れて修行していたんだが、そういえば原作でこんなこともあったな〜という事が起こった。

父が兄を連れて友人？の家に行ったんだが、帰ってきてからどうも打倒六道家！といいだしては山籠りの修行を始め出してしまった。そしたら母が僕の手を取って、お母さんと一緒に行きましょうと家を出る事になった。

出てった先は東京、何でも母は結婚する前はバリバリのキャリアウーマンだったそうで、昔務めていた村枝商事というところに復職することになったそうだ。

さらに離婚も成立して僕の名前は近衛幽樹となった。

母と二人だけの東京生活も二年が経過した。

七歳になった僕は今日も今日とて修行を続けている。

肉体の方は、子供の時から無理をすると体の成長を乱してしまうのでそれほどでもないが、霊力の方は自分でも驚くぐらい上がったと思う、マイトにしてみれば50マイトぐらいで一般のGSと同じくらいだが、年齢を考えればまだまだ上がることは確かだろう。

そんなとき、僕は一人の少女に出会った。

六道冥子、僕の両親が別れる理由にもなった六道家の一人娘、まあだけでも別に僕は彼女に対して思う事は無かった。

けどこれは勘弁してほしい。

公園の中でビエーンと泣き叫ぶ六道冥子、これだけだったらすぐに慰めてあげようとも思うのだが、すぐ近くを縦横無尽に暴れる六道家に代々伝わる式神十二神将、これがプツンか、なるほどこれはかなり危ない。

少し無視して行っちゃおうかなーとも思うが、放っておくわけにもいかないか。

「封魔の術」

懷に忍ばせていた札を投げると、十二神將の一体が札の中に吸い込まれる。

実は使うのは初めてだったのだがこれはいけるかなと思ったが、なんとすぐさま札を破り中から式神が飛び出る。

十二神將が強力な式神のせいでもあるが、どうもまだまだ僕も未熟のようだ、だがしかし、封印を破るのにも力を使うはず何度もやればその内力を失い影の中に戻るだろう。

これは根気比べの勝負になるのかな、両手に何枚もの札を構えると僕はにやりと笑ってやった。

結局、鎮圧するのに1時間かかってしまった。

もう汗がダクダクだ。靈力自体は札を作るときに札自体に注入したものを使ったが、それでもかなり疲れた。

後に残ったのはまだ泣き続ける六道冥子、今の騒ぎにも気付いていないようだ。

「どうして泣いているんだい」

頭をなでながら優しく問いかけてあげてあげる。

六道冥子はまだグスツていたが、僕に気付くと上目遣いに見つめてきた。

本当に子供っぽくて年上にはどうしても見えない、まあ精神的にはこちらがかなりの年上なのだがな。

「・・・冥子ね。グスツ：冥子ころんで足がいたいのに」

「そうかそれは痛かったね、ほら痛い痛い痛い飛んで行け」

確かに転んだのだろう赤くなっているとところを靈力を込めた右手で

ヒーリングしながらさすると、もう痛くなくなったのだろう、笑いながら僕を見つめてきた。

「すごい、もういたくない、ありがとう」

「ああ、よかったね」

内心ちよっと、せっかく作った札を大量に消失してしまった事が残念に思うけど、仕方ないか。

「じゃあ、僕はもう行くよ」

僕はもう家に帰るために公園から出ようと思ったが、クイツと服が引っ張られた。

振り返ると六道冥子が服を掴んでいる。

「ねえ冥子ちゃんとあそぼうよ」

断ろうとも思ったが、それを察したのかまた泣きそうになっている。

「・・・ああ、いいよ」

僕に選択肢は無かった。

遊ぶ際には細心の注意を払い、六道冥子に傷一つ付かないように気を付けた。

日が沈み始め、夕方にもなるとさすがにもう帰らなくてはならなくなった。

六道冥子、いや、冥子ちゃんはそんな僕の一つ約束を求めた。

「ねえ、ゆくん、私達友達だねえ、明日もまた一緒に遊ぼうよ」

正直に言ってそれは肉体的にも精神的にも危険な御誘いだった。だがしかし、冥子ちゃんとはたしかGS試験の時に出会った美神令子が初めての友だちだったはず、それまで名家に生まれ十二神将を受け継いだ彼女には誰も友だちになってくれるような子はいなかった。だからとてもさみしい日々を過ごしたんだろうという事が何となくわかった。

「いーよ。また明日も一緒に遊ぼう」

断られるかもしれないと思っていたのだろう。何処か暗い表情をしてうつむいていた冥子ちゃんも僕の答えが嬉しかったんだろう、春が来たようなきれいな笑顔を浮かべるとうんと頷きかえっていった。僕はロリコンじゃないんだけどな、どこか自分をごまかすように頭をかくと少し赤くなっている顔を隠すように自宅への帰路を進んだ。明日までにまた札を自作しないといけないと思いながら。

面倒なことになったと思う。冥子ちゃんとの約束道理に公園に行つたのだが、そこに待っていたのは冥子ちゃんとなぜかメイド服を着た女性だった。

誰だっけ？ わからないがとりあえず六道家の関係者だろう。

その内来るんじゃないかと思ってもいたが、昨日の今日では早いな。

一人娘に変なのがついたと調べに来たのだろうか。

「はじめまして近衛幽樹くんですね。私は大鳥フミ、六道家に仕えるメイドです」

フミ、そんな名前の人がいたような気がする。

「はじめまして、…でそのメイドさんが僕に何か用があるんですか？」

「はい、先日はお嬢様がお世話になったそうで、ご迷惑をおかけしたと思ひお礼をしたいと奥様が申したんです。よろしければ一緒に来てはもらえないでしょうか」

フミさんが指し示す先には一台のベンツ。それを見て僕が思う事は、はっきり言って行きたくないという感情だった。

これ多分警戒されてるよ、自分たちの陣地に引き寄せて逃げられなくさせてからじっくりと絞るつもりだ。

「お礼なんて結構ですよ。泣いている子がいたら助けるのは当たり前前の事です、それに対して何かをしてもらうというのは別にいいですよ」

断るのがベターだろうこれは、何かあるかわからない純粹にお礼の可能性も無いとは言えないがたしか冥子ちゃんの母親はなかなか陰謀家だった気がする。

冥子ちゃんのお友達にはなろうと思ったが、六道家と関わるのは自分の実力的にも避けたいところだ。

冥子ちゃんのお母さんは冥子ちゃんが近くにいれば十二神将を操る事ができたはず、それは無いだろうが力で脅されたら多分かなわない。

「そこを何とかお願いできませんか」

「いえ、せつかくのお誘いですがご遠慮させていただきます」

その時だった、今まで黙っていた冥子ちゃんが僕の手を掴んできたのは。

「ねー、いこーよ、ユークン。冥子ね、お友達をー家に招待するの
がー夢だったんだー」

屈託のない笑顔、その顔を見ていたらなんだか考え込んでいる自分
がバカらしくなってきた。わかった、罨でも何でも言っつてやろうじ
やないか。

「わかったよ冥子ちゃん、じゃーお邪魔させてもらおうかな」

「ようこそーよくきてくれたわねー鬼道幽樹くん」

もうそこまで分かっていたのか。六道家の情報網は侮れないな。

冥子ちゃんに席を外させて、ソファアの向かいに腰掛けるのは冥子
ちゃんのお母さん。さすが親子、冥子ちゃんを何十年か成長させた
感じで結構似ている。その隣に立つのは僕をここに連れてきたフミ
さん。

やっぱり罨かな。

「はじめまして冥子ちゃんのお母さん、僕の名前は近衛幽樹ですよ」

分かって言っただろうが、一応指摘しておこう。

無事に家に帰れるといいな。

「あらーごめんなさいねー幽樹くん、それとーお婆さんの事はー冥
菜さんでいいわよー」

「そうですか。では冥菜さん、僕に何か御用ですか」

はっきり言って、腹の探り合いなんて僕の実力ではかなわないだろ
う。ここは単刀直入に聞いてしまおう。

「ううーん、勘違いしないで、おばさんは別に幽樹くんに何かをしようと思っっているわけではないの、ごめんなさいねーただ確かめたい事がいくつかあったの」

別に六道家と鬼道家の確執（といっても鬼道家が一方的にそう思っているだけのようだが）で冥子ちゃんに近づいたとは思ってはいないようだが、だとしたら。

「聞いたわー昨日また冥子ったら暴走しちゃったみたいで、でも幽樹くんが止めてくれたのよねーありがとねーでも、どうやったのか、よければおばさんに教えてくれない」

やっぱり術の事についてか。

「それに関しては詳しく教えることはお断りさせていただきます、鬼道家秘伝の術なので申し訳ありませんがそれは出来ません」

鬼道家秘伝なんて言ったが、父達にも内緒で勝手に独占しているんだけどな。

「あらー、そうなのー知らなかったわー鬼道家にそんな術があったなんてー、でもそう内緒なのー残念ねー」

あまりそうは見えない、腹の中では何を考えているのだろうか。

「それとーこれが一番重要なことなのだけどー」

冥菜さんの目つきが変わった、今までのどこかのほほんとした顔ではなく真剣に何かを願うそんな顔、隣に立つフミさんもそうだ。

「幽樹くんは冥子のお友達なのよね」

どうやら先入観で僕の目は曇っていたようだ、冥菜さんは純粹に娘である冥子ちゃんの事をしっかりと愛しているんだとよくわかった。

「はい、僕と冥子ちゃんは友達です」

「そう、ありがとうね、幽樹くん」

冥子ちゃんに友達ができない事をずっと心配していたんだな。

「これから冥子のお友達でいてくれる」

「はい、もちろんですよ」

僕の答えを聞いて冥菜さんは、何かの重荷が取れたかのようにほっと息をついて顔を隠すように手を当てると、気のせいかもしれないが涙の雫がこぼれたような気がした。

そんなときタイミングよくガチャリとドアが開く音がした。

ドアの隙間から顔をのぞかせるのは冥子ちゃんだ。

「お母様ももうお話は終わった？」

冥菜さんは顔から何かをぬぐうようなしぐさをして、次にはもう元に戻っていた。

「ええ冥子、もう話は終わりましたよ。さあ二人で遊んできなさい」

僕はソファを降り冥子ちゃんの手を握った。

「さあ、何して遊ぼうか」

舞妓ちゃんは嬉しそうに手を握り返すと朗らかに笑う。

「えくとね、えくとね、じゃあ鬼ごっこ」

僕は死ぬかもしれない。

第一話（後書き）

作者はまだまだ未熟です。

お見苦しい点が多々あると思いますがよろしくお願いします。

第二話

僕が冥子ちゃんに会い、そして六道家と知り合ってから、もう二年の月日が流れている。

僕が九歳になり、冥子ちゃんは十三歳。それまでの間に何度か死にそうな目にもあったが、今でも変わらず友達づきあいは続いている。今もなんだかんだ言って、六道家の修練場を貸してもらってそこで修行している。

「冥子くもうく疲れちゃったく」

一緒に修行をしていた冥子ちゃんが汗を流しへたり込んでいます。時計を見ると時間はもう昼十二時を指している。日曜日の朝九時からいから始めたからもう三時間か。

「そうだね、疲れたんなら休んで僕ももうちょつとしたら休むから、そしたら一緒にご飯を食べよう。」

「うん」

冥子ちゃんが僕の修行につき合い出してからどれくらいたったかな？最初は僕が修行しているのをじっと見ているだけだったけど、退屈だったのかそれとも寂しくてかまってもらいたかったのか、私も一緒にやると彼女が言い出したんだ。

これに驚いたのは冥菜さん達だ。

もう泣きながら、あんなに修行を嫌がっていた冥子が自分から言い出すなんて、おおよよよよといった具合だ。

僕も修業の成果がちゃんと出たのか霊力も上がって言っている。マイトにしてこの前測ったところ六十五マイト、それでも冥子ちゃんは九十マイトだったけどね。

午後フミさんが用意してくれた昼食を食べながら僕は思った。
もうそろそろいいかなと、霊力も上がったし、霊的格闘の訓練も積んだ。

かといって自分の実力を増長するのはまずいが、それでもそろそろ僕の式神を作ろうかな。

妖魔を素材として造る以上、その元となるものが当然必要だ。

ならばどこから手に入れる？ 個人で山を分け入って探す、当てもなく言っても見つからない可能性と自分自身の身の危険も高いか、ならばGSの仕事に同行させてもらうか、見ず知らずの子どもを連れて行ってくれるわけ無いな。

だけど、方法が無いわけじゃない。借りをあまり作りたくは無いが、これが一番安全でなおかつ実践経験が手に入りそうだ。

「冥菜さん少し頼みごとがあるんですが、いいですか」

食事が終わったところで突然に声をかけられた冥菜さんは僕の言葉にキョトンとした。

「ええーいいわよー幽樹くんー、でもー珍しいわねー幽樹くんがー頼みごとをするなんてー」

冥子ちゃんもうんうんと首を縦に振っている。

「実は、三週間後に六道女学院の林間学校があると聞いたんですが、それに僕を参加させてはくれませんか？」

さすがにこの提案には驚いたのか、冥菜さんは眼をぱちくりして左手を口元にやって考え込むと、僕に尋ねた。

「うーん、幽樹くんはーどうしてー参加したいのー？」

「僕が将来、GSを目指しているのは知っていますよね、そのために実際の除霊現場に参加して経験を積みたいと思ったんです。

嘘ではないそれも目的の一つであることには違いないからだ。

自惚れかもしれないが、女学院の生徒よりもいい動きをする自信はある。

何か僕の本音を探るように冥菜さんは観察すると、おもむろに息を吐きだした。

「いいわゝ、特別に参加を認めてあげるゝ。でもゝ条件があるわゝ、幽樹くんはゝ見学だけゝ戦いに参加しちゃゝダメよゝ」

実践に出なければ意味は無いんだがなゝ、しかしこれ以上ごねるといく事すら駄目になるかもしれない。

こことりあえずそれで納得して、冥菜さんには悪いが、向こうに着いたらすきについて抜けだそう。

学生で相手になる程度の妖怪ならば、僕でも大丈夫だろうし、用事を済ませたら戻ってくればいい、叱られるかもしれないがその時はその時だ。

「はいお願いします」

ガタツ、話がまとまったと思ったら冥子ちゃんが突然立ち上がった。

「私も行く」

いつもののほほんとした声ではなく、何処か真剣な表情で冥子ちゃんも参加を表明した。

この時、結局僕は油断していたんだと思う。自分の力を過信していた。

原作の記憶と学生の為の演習だということで悔り失念していた。実際の除霊現場は時として何が起こるか分からないという事に。

あつというまだが、三週間が立った。

僕と冥子ちゃん、冥菜さん、それに六道女学院の生徒と引率の先生たちは、除霊実習の林間学校の為にとある山のふもとにある旅館に來ています。

「えゝみなさんゝ。この子はゝ近衛幽樹くんゝ今回特別にゝ除霊実習の見学に來ましたゝ、将来の夢はGSになる事なのゝ、皆さんがゝ活躍するところを見せてあげてねゝ」

旅館のホールに六道女学院関係者全員が集められ、冥菜さんが明日行われる予定の除霊実習についてと僕と冥子ちゃんの事に関しての説明が行われた。

生徒の方に特に反対する者がいなくてよかった。

逆に、私が守ってあげるからねーと言ってくれるものも多かった。

「続いてゝ今回皆さんの除霊実習をゝ手助けしてくれるゝプロのGSを紹介しまゝす」

ホールの扉が開けられ中に入ってきたのは、牧師服を着たメガネの中年と亜麻色の髪的女性。

「今回皆さんのサポートをする唐巢です」

「同じく美神美智恵です」

確かに冥菜さんは二人と親交篤かったとはいえ、ここで二人が出てくるとは予想していなかったな。

「二人とも、凄腕だから、安心してね」

抜け出すのが難しくなりそうだ。

旅館の部屋の組み合わせで僕は唐巢神父と同室に、冥子ちゃんは冥菜さんと同室になっている。

「近衛君、明日は実習は私のそばにいるんだよ。GSを目指して頑張るのはいいけど、危険の無いようにね」

「はいよろしく願います」

言葉とは裏腹に僕はどうやって抜け出すかを考えていた。

唐巢神父は日本でも有数の実力者だ、ごまかせるか心配だが、まあやってみるか。

「さて私はお風呂に行くが、君はどうする」

「ああ、僕は後で入りますので、おきになさらず」

「そうかい」

唐巢神父がお風呂に向かって部屋から出て最初の曲がり角を曲がったのをドアの隙間からのぞいて確認すると、部屋に置いた荷物を開き、中からこの日の為に用意していた札束を取り出し懐に仕込んだ。

さらに仕込んだ中から一枚の札を取り出すと、部屋の畳に放り投げる。

ボンッと小さい煙とともに現れたのは、僕と瓜二つの姿をした式神、戦闘能力は全くないが、身代わりにはなるだろう。

布団を敷いて、横にさせると僕は部屋から抜け出した。

誰も僕が一人で山に向かおうとしているなんて思わないから、女学生は僕の姿を見ても止めようとは思わない、時々話かけられても明

日の事に関して緊張してるのかと、大丈夫お姉ちゃん達が守ってあげるからね、と頭をなでるくらいだ。

「あら、君は確か近衛君よね」

もう少しでロビーというところで声をかけられた。・・・この声は、振り向くとそこには美神さんがいた。

「どうしたのこんなところで、明日は除霊実習よ。しっかり休んでおきなさい」

頭をかかげて、僕と目線を合わせると、美神さんは僕に注意を促す。この人は確かカンがかなり鋭かったはず、ボロを出さないように気をつけなくてはいけないな。

「すいません、どうにも緊張しちゃって少しぶらぶらとしてればそれもまぎれるかなと思って」

「そう、わかったわ。でも外に出ないようにね、危ないから」

僕の言う事を信じたのか、美神さんは僕に背を向けるとそのまま言ってしまった。

ふうっと一息つくと、僕はこれ以上ひと目につかないように身を隠しながら外へと出ていった。

僕のあとをつけるものがある事に気付かずに。

「封魔の術」

暗い森の中突如として飛びかかる妖怪、こだま鼠（マタギの霊が変化したもの）と言われている、己の肉体を破裂させ肉や内臓を辺りにまき散らす）を投げつけた封魔の術の札に封じ込める。

「僕の実力でも十分いけるな」

この山に入り込んで既に数戦重ねている。

見習いGSにもなっていない女学生の相手となる妖怪だ、やはり大したことはな順調に封印した妖怪が増えていくいずれは式神として僕に力を貸してもらおうつもりだ。

「そこで何をしている少年、予定ではGS達が来るのは明日ではなかったのか？」

突如として後ろから声をかけられる。

振り返るとそこには白い梟、樹の枝に足をかけこちらを見下ろしている。

明日GSと女学院の生徒が来る事を知っている！冷気を質を見る限り、ただ妖怪というよりも何処か精霊または霊獣に近い清浄な気を感じる。

「あなたは何者なんだ」

僕が問いかけると梟はウムとでも言うように首を縦に振った。

「私は数百年の時を生き妖怪へと変化した梟、この山の番人をして
いる」

「僕の名は近衛幽樹、霊能力者見習いというところです」
「そうか」

互いの自己紹介はしたが、当然ながら僕は白梟の疑問に答えていないから改めて問われた。

「で、何をしておるのだ」

言いづらい、けど言わなくてはならないのだろう。

勝手に旅館を出た事を僕は隠すつもりだ、だから説得しなければならない。

「・・・実は、僕はあなたの言うように明日の除霊実習に参加する予定のものなんですが、僕に許されたのは除霊する現場を見学する事だけ、ここへは誠に勝手ながら己の実力を試しに来ました」

梟は片羽根を口元にやると考え込む。かなり人間臭いしぐさに僕は感じた。

「腕試しか、血気盛んな事だ。だが、少年よ。今宵はもう仲間達の元へと帰るがいい、この時期はこの山に多数の妖怪がその姿を現す。危険だ」

確かにそろそろ帰るべきかな、一応式神の元とする妖怪を何体か捕まえたし、部屋に置いてきた身代わりもまだ大丈夫だと思うが、気付かれないうちに戻るのが大事だろう。

「わかった、そうするよ。わざわざありがとう」

「うむ、途中まで私も付いていこう」

旅館へ帰る道中、僕は白梟に頼みごとをしていた。

「何、黙っていてほしいだど？」

「はい、ここへは勝手に来てしまったので気付かれたらまず間違はなく叱られてしまうでしょう、一応部屋には身代わりを置いたのです。まだ気付かれてはいないはずなんです」

この話を聞くと白梟は笑うようにホウホウ鳴いている、またどうにも人間臭い妖怪だ。

「うむ、まあ黙っておいてもいいぞ、次からは自重するのだな」

「ええ、ありが「きやあああああああああつあああー」
「ー」・・・どう？」

突如として響く叫び声。・・・これは冥子ちゃんの声！瞬間僕は駆け出していた、後ろから呼び止める白梟の声も聞かずにただひたすらに冥子ちゃんの無事を知るために。

そこはまるで戦場跡のような錯覚を僕は受けた。

ある中心から一定範囲の木々がへし折れ、草花は根こそぎ散らされて、十一の怪物が暴れている。

惨状の主は：冥子ちゃんだった。

泣きわめく冥子ちゃんに引きずられ暴れる式神達。プツンしちゃうてるよ、おまけになぜか一体足りない。

「な、何だこれは」

惨劇を見た白梟が驚愕の声を上げるがかまっている暇は無い。

「冥子ちゃん！」

名前を呼ぶが、気付いていないようだ。そもそもなぜここにいるんだ、・・・まさかついてきていたのか。

とりあえず、彼女の暴走を止めなくてはならない。

「おい、危ないぞ」

僕は冥子ちゃんに向かって駆け出した、ヘビの式神サンチラの放つ雷撃を避け、イノシシの式神ビカラの突進を飛び越え、ウサギの式神アンチラの鋭い刃状の耳を細かな切り傷をつけながらもそのまま直進して僕は冥子ちゃんの目の前までやって来た。

冥子ちゃんとの日々は、毎日とは言わないが暴走もかなりあったこれはもう一種の慣れだろう。

「もう大丈夫だよ。冥子ちゃん」

故に、暴走した冥子ちゃんを止める手段を僕はもう見つけていた。人目につくと恥ずかしい方法だが、これが一番効いて、だからそれを行おうとした。

だが次の瞬間。

「なっにい！！」

式神の暴走の衝撃によって足元の地面が崩れ、僕と冥子ちゃんは穴に落ちていった。

その時僕に出来たのはただ一つだけ、一緒に落ちる冥子ちゃんを引き寄せて自分の身を盾にすることぐらいだった。

「しょうねーーーーーんっ」

白晝の叫び声が耳に届く中、闇へと僕と冥子ちゃんはその中に消えていった。

Side 美神美知恵

明日の除霊実習の為の用意をしていると、途端に何処から暴れる

音がした。

気になって見に行くとそこでは六道冥菜が慌てふためいていた。

「どうかなさったんですか六道先生？」

私は見習いGS時代、途中からは唐巢神父に師事したが、それより前は六道先生が子供を妊娠するまで学びを受けていた。

少しぼわあくっとした方だが、意外としたたかで抜け目ないところのある人だ。

そんな彼女が取り乱すなんて、おそらく何かがあったのだろう。

「あっ、美知恵ちゃん」

私に気付いた六道先生がすがりつくように抱きついてきた。

「一体何があったんですか」

訊いてみると、どうやら六道先生の娘さんがいなくなってしまったらしい。サル of 式神マコラの変身能力を使って身代わりに仕立て上げていたらしく、とりあえず誘拐ではないようだが、一体どこに。考えていると、その時私の脳裏に一つの靈感が走った。

六道先生を連れて向かうは唐巢神父の部屋。

コンコンツと戸を叩くと中からは、風呂上がりなのか珍しく神父服ではなく浴衣を着た唐巢神父が出迎えた。

「どうしたんだい美知恵君」

困惑したように唐巢神父が問いかけるが、それより先に聞かなくてはならない事がある。

「すみません唐巢神父、中に近衛君はいらっしゃいますか」
「うん、ああいるよ。どうやらもう寝ているようだがね」

近衛君は関係なかったか？でも、自分の靈感は確かにそうだと告げている。

「少し失礼します」

「お、おいおい」

部屋に上がり込むと一直線に近衛君の眠る布団に近づいて確認すると、確かに近衛君だ。

でも、何か違和感を感じる。私は眠る近衛君に霊波を流し込んでみると次の瞬間、近衛君だった者は一枚の札に代わっていた。

六道先生、唐巢神父が驚愕に此方を見つめる中、近衛君だった札を持ち上げると私は厳かに告げた。

「どうやらまずい事態になったようです」

第二話（後書き）

書いている途中、一つの妄想が走りました。
式神を擬人化させようかな？
この妄想生かそうかどうかでしょうか。

第三話

「う、うゝん」

体の至る所に鈍い痛みを感じながら目覚めると、そこは暗闇の中だった。

どれほどの間気絶していたのかわからないが、とりあえず僕は生きていて腕の中に感じる温もりは、まず冥子ちゃんだろう。

辺りは真っ暗なので明かりを造るために懷から札を出そうとして僕は気づいた。

かなりの数の札を失っている事に、おそらく落ちるときに衝撃で何処かに行ってしまったんだろう。

この状況で己の手札を無くすとは間抜けだなと自嘲しながらも残っている札を一枚取り出すと靈力を込め宙に放る。

それは光を放ち、辺りをまばゆく照らし出した。

腕の中の冥子ちゃんを見ると特に怪我もなく、すやすやと眠りけている、こんな状況で眠れるとはある意味すごいな。

感心とも呆れともつかぬ感想を抱きながら、いたずらに柔らかなほっぺ突ついていてみたら、突然声をかけられた。

「イチャついてる場合じゃないぞ少年」

「うおおおおー」

驚きながらも声の方角を見ると、そこには白い梟。

「な、何だ、お前か。びっくりするじゃないか」

「む、すまぬな」

驚かせてしまった事に白梟はまたもや人間臭く頭を下げるが、そこ

で僕は気づいた。

「あれ、何でお前がいるんだ」

白梟はやれやれというように、頭と両翼を振るうと、指差すように片翼で上を指し示した。

「この穴の中はとても危険だ、そしてそこに落ちていく少年たちを見過ごすわけにもいかなかったというだけだ。それより上を見ろ」
つられて上を見ると、僕達が落ちてきた穴は落盤の衝撃か岩や土などによってふさがれてしまっていた。

「土砂に生き埋めにされなかった分、よかったな」

白梟に言葉にまったく同意してみるが、さて困った。どうやって外に出よう。

プランは二つ、この場にとどまり救助を待つ、それか自力で脱出する。

視線を向けるとそこには何処かに続いているのかもよくわからない通路があった。

僕が何を考えているのかわかったのか、白梟が忠告する。

「出口を探すつもりならば、やめておいた方が賢明であろう。私にも道はわからないし、おそらくこのほこらの中には、妖怪や悪霊が徘徊しているであろう。この近くには居ないようだが、出口を探すために動くのならば自ずと出会ってしまうだろう」

出口を探すのは危険か、札も少ない、動かずに救助を待った方がよ

さそうだな。

冥子ちゃんもおそらくマコラを身代わりにしてきたんだろうし、先程暴走してたんだから多分マコラの変身も解けているだろう。多分抜け出した事は気づかれている。

「そうか。しかしここはほこらの中なのか？」

「さよう、ここには何百年も前に封印された妖怪を鎮めるために作られたほこらだ。この時期になると、封印されている妖怪の力が増し、その力に引き寄せられているいろんな妖怪がこの山に来てしまうんだ、六道家にはその妖怪達を倒すか追い払ってもらっているんだ。危険な妖怪が暴れる事によって封印が壊れたらまずいからな」

ここに妖怪が封印されていたなんて知らなかったな。

それにこんな裏話があったなんて、まあ決まった時期に妖怪が集まる事がわかっていたなら、合宿にはちょうどいいのかもしれないな。ちよっと納得。

S a i d 美神美知恵

近衛君と冥子ちゃんが両方そろって失踪した事に関して、私と六道先生、唐巢神父は一緒になって相談することになった。

今のところほかの教員には、まだ知らせていないがいずれ知ることになるだろう。

「近衛君はく除霊に参加したいってく言ってたわく、だからく見学だけなのは嫌でくもしかしたらく山に入ってしまったのかもく。冥子は多分くそれについて行ってしまったんじゃないかしらく」

緊張感に欠けているしゃべり方だが、六道先生の顔は青ざめていて今にも倒れてしまいそうな感じだ。

「なんという無茶を、申し訳ありません六道さん、彼とは同じ部屋だったのに気付く事が出来なくなつて」

唐巢神父もなんて事だと顔を両手で覆っていて、神に二人の無事を祈っている。

とにかく子供たち二人は今、妖怪悪霊の徘徊する危険な山の中へ踏み入ってしまったという事。
ならば、やることは一つ。

「六道先生、唐巢神父、私が二人の救助に行ってきます」

伏せていた顔を上げた二人が私を見つめる。

危険は大きいが二人を放っておく事は出来ない、誰かが行かなくてはならない。

私の言葉に唐巢神父も立ち上がると。

私も行こうと自らの参加を表明する。

「お願いします」

唐巢神父は凄腕のGSで自分自身も師事していた。彼が来てくれるというならば心強い。

「私も「それは駄目です」」

六道先生の言葉を覆うように遮ると、私は彼女の言葉を止めた。

「六道先生はここに残ってください。ほかの方への説明もありますし・・・、心配なのはわかりますが私たちに任せてください」

私は六道先生の手を握ると宣言した。

「必ず、子供たちを連れて戻って来ます」

Side out

「何をしているんだ」

洞窟の床に札を地面に並べる僕に白梟が問いかけた。

「ああ、今はまだ、ここには妖怪達はいないようだが何かあるかわからないしな、札もほとんどを無くしてしまったから、戦うすべを用意する必要がある。今置いている札には僕が先程封印した妖怪が中にいるんだ。これを今から僕の式神に加工する」

地面に置かれた札は四枚。

中に封じられた妖怪はこだま鼠が三枚に、野槌（直径十五センチ、体長一メートルくらいで、太さの割に短くへびに似ているが、頭のとっぺんに口がある以外眼も鼻もなく、ちょうど柄の無い槌のような形をしている。）が一枚。

本当は家に帰ってからするつもりだったが、仕方がない。

僕は親指を噛み破ると、流れ出る血をこだま鼠の一枚に擦り付ける。

「其は我が従僕、其は我が敵を破砕するもの其は破裂の灰、その名は『灰児』^{はいじ}」

次の瞬間札が破れ、中から現れたのは一匹の灰色の鼠、尻尾が導火線になっておりその先が灰色にバチバチと火花を散らしている。

僕はそれを確認すると、額から思わず汗が出た。

「初めての術だったが、うまくいったようだ、よかった」

灰兎は僕の服を駆け上がると肩の上にちょこんと乗った。

「ホウ、すごいな」

白鼻も僕の術に感心してみていた。

続けて次の野槌の札に血を流し込む。

「其は我が従僕、其は我が敵を砕くもの其は黒き鉄槌、その名は『黒陽』」

現れたのは金槌のような頭部を持つ黒きへび。

腕に絡まる黒陽をなでると嬉しそうに身を震わせる。

続けて残るこだま鼠もまた、それぞれ「灰怒^{はいど}」「灰音^{はいね}」と名付け式神とした。

これで戦うすべは用意した、まっ、使わないで済むのが一番なんだから。

ドガガガガガガガガガガガガガガガッ

その時だった、突如として大地が揺れたのは。

「じ、地震っ!!」

天井や壁から、地震により元々緩んでいた地盤が崩れて。瓦礫が降って来た。

「やばい!」

すぐさま冥子ちゃんを抱えると、通路に駆け込んだ。

それと同時にドーンっと先程までいた広間が瓦礫や土砂で埋まってしまった。

地震はすぐに収まったが、今の衝撃で大分壁とかが脆くなってしまっていていつまた崩れるかわからない。

もう、ただ救助を待つという事は出来なそうだ。

こんな状況でも全く起きない冥子ちゃんを担ぎなおすと、僕は白梟を連れて出口を探すために歩きだした。

もつとも、冥子ちゃんが起きているとプツンしちゃって生き埋めになってしまいかもしれないから助かるには助かるんだがな。

Side 美神美知恵

私は唐巢神父を連れて山の中に入るが、やはり見鬼君（箱の上に人型の人形がつけられている霊力センサー）は役に立たない。反応が無いんじゃない、反応がありすぎるんだ。

それだけでもこの山が妖怪、悪霊が多数存在する危険な山だという事がわかる。

・・・子供たちの安否が気にかかるところだ。
とにかくこうなったら足で探すしかないか。

「唐巢神父、二手に分かれて探しましょう」

「わかった美知恵君、私こっちを探す」

唐巢神父が行った方を確認すると私も逆の方を探し始めた。

そしてしばらく搜索していると、突如として地面が激しく揺れ地震が起こった。

「くっ」

ガラガラッ、地面に手をつけ態勢を守っていると、私の耳に何処かが崩落する音が聞こえた。

地震はすぐに治まったが、私はその音がするところを念の為調べることにした。

「これはっ！」

そこには土砂や瓦礫で塞がっていたが大きな穴があった。

私はこの時思い出した。そう、以前六道先生から聞いた話だ。

この山の中には洞窟があり、その中は、昔ある妖怪の棲みかだった。強力な妖怪でいく人も犠牲者を出したそうだが、とある侍がついには打ち倒したが、滅するには至れず、道士の力を借り洞窟の中に祭壇を造って封印したそうだ。

もしや二人はこの中に、自然といやな汗が流れる。

だが地上で見当たらないなら、中を探さなくてはならない。

いや、きっと中にいる。

だって、私の靈感がそうささやいているから。

S i d e o u t

「なあ、あれはなんだ？」

視界の先には一体の幽霊、武者の装備を身に付けたそれが何処とも知れぬ方を見ながら浮かんでいる。

僕は隣を羽ばたいている白梟に訊いてみる事にした。

この山に住んで長いそうだから、何か相手の謂れを知っているかもしれない。生前に善きものであったなら、相手に人格が残っていれば出口を教えてもらえるかもしれない。

「あの者が誰かはわからないが、封印されるまで何人もの侍や道士

が戦いを挑んでは返り討ちにあい殺された。あの者もきつとその内の一人のなれの果てだろう」

ま、そんなところだろう。さてどうしたものか、侍の霊は道の真ん中に浮かんでいる、他に道はないし通るには必然的に横切る必要がある。

悪霊でなければいいのだがな。

「来い、黒陽」

僕の呼びかけに答え、影の中から、式神黒陽が姿を現した。

いざという時の為に黒陽を守りにつかせて僕は意を決して侍の靈に話しかけた。

「こんばんわ」

挨拶から入ってみたのだが、返事は無し。それが悪い事かいい事かはわからないが、それでも関わり合いになっている暇はない。先を急ぐ。

ブンツ

突如として振るわれた狂刃を防いだのは、黒陽の頑丈な頭部の槌。

[illegible]

どうやら完全に人格が崩壊し理性が無いようだ。戦いは避けたがったが、そうもいかないらしい。

「黒陽・槌式^{ついでしき}」

装甲の術の言霊を受け、黒陽がその姿を武装としての姿に変えた。現れたのは槌、ゲートボールのスティックにも見える槌を右手一本で構えると、僕は侍に相対する。

「死ね死ね死ね死ねえええー」

技も何も無くがむしやりに振るわれる刃。この程度普段ならば、避けたうえで反撃を加えてやるのだが、だが、背中にある大事な重みが僕の動きを妨げる。

だがこれを放る僕にはできない、結局防戦一方だったのだが、そこを白梟が助けてくれた。

横から侍の霊の頭をつつき、出来たすきに黒陽・槌式を叩きこんだ。霊力のこもった黒陽・槌式の一撃を与えられた侍の霊は、吹っ飛びながらその姿を消滅させていき除霊された。

「ありがとう」

「構わない少年」

援護をしてくれた白梟にお礼を言う。実際今のは結構危なかった。こんなのがまだまだいるんだとしたら、無事にここを出るのはかなり難しそうだ。

先行きがかなり不安になってきた。

Said 美神美知恵

「ここが入口ね」

目の前に立つのは鳥居、その先には暗い洞窟。

「本当にここにいるのだろうか」

合流した唐巢神父が疑問の声を上げるが、ここで間違いないと私はなぜかそう確信している。

「行きましょう、唐巢神父」

無事でいてほしい、そう思いながら私と唐巢神父は洞窟の中へと足を踏み入れていった。

洞窟の中はやはり、数多くの妖怪悪霊が蠢いていた。

私は神通棍でなぎ払い、破魔札で浄化しながら進むが数も多く道が入り組んでいる。

これでは生存は絶望的か、諦めが私の脳裏をかすめた。

その時だった、ドォーンと何かを碎かれる音がしたのは。

私は唐巢神父と目を合わせ頷き合うと、その音がした方へ向かい始めた。

第三話（後書き）

長くなりそうなので途中で切りました。

どうにも強引に仕上げてしまった気がする。

先頭描写は難しいし、なかなか文はうまくならないものです。

第四話

「はああああー」

僕の振るう黒陽・槌式が悪霊を粉碎し消しさる。

出口はどこなんだろう、歩き回るのが一向に見当たらない。

見渡す限りの岩や土の壁、迫りくる妖怪と悪霊。今はまだ僕の力でなんとかなっているが、体力精神ともに擦り減っていつて。現に今だって大分呼吸が乱れてしまっている。

「大丈夫か、少年」

白梟も心配しているが、だがそれでも戦わなければ生き残れない。自分が何とかしないといけない、守らなければならぬ者がいる。自らにかかる重圧が疲れと合わさり、冷静な判断力と注意力を奪っていた。

だから不意打ちにも気付けなかった。

「危ない、後ろだ！」

少し広い小部屋のようなところにつき中頃まで歩くと、白梟が突然叫んだ。咄嗟に後ろを振り返ると、迫り来る赤い何か。高速で迫るそれに僕はかわせないと思った。やられる！

「しまった！」

迫りくるだろう衝撃に思わず身が固まるが、それが僕に当たる事はなかった。

「がああっ」

白梟が僕をかばっていた。赤い何かに貫かれ墜落する白梟を受け止め傷を確認するが、これは、致命傷だという事が僕にはわかった。

「よそ見をするな、馬鹿者」

白梟の叱咤がとぶ、そうだ！あの赤い何かの正体を確かめなくては、引き戻される赤い何か、その先にいたのは。

「ヤモリ？」

そこにいたのはヤモリ、黄色と緑のまだら模様の体色三メートルはあるだろう巨体がそこにいた。あの赤いのは舌か！！

「な、何で、どうして気付けなかった」

巨体に派手な模様、普通は気づく。だが、気付かなかった。その答えはすぐにわかった。

「色が！」

巨大ヤモリはカメレオンのように徐々に体色を変化させると壁の色と同化してその姿が消え去ってしまった。

何も見えない、奴の姿が、何処だ！何処にいる。

「右だ」

また告げたのは、白梟。迫りくる舌を避けると、僕は式神灰児を呼び出す。

「灰児・煙式」
えんしき

呼び出された灰児はその姿を変え現れたのは、まるい球体の爆弾それをそのままけり込むと、球体は破裂し煙を放出する。

煙玉が灰児の武装形態だ。灰怒と灰音も元は同じくこだま鼠を素材にしているが、それぞれ違う効果を持つ爆弾になるし、爆発しても影の中に戻り再生する。

煙で姿を隠しヤモリをかく乱している間に僕は壁にあったくぼみに移り白梟を置き、冥子ちゃんを壁に寄り掛かせると、残っていた札のほとんどを使い、姿を隠す不可視の結界を張った。

遠くまで離れることもできず、苦渋の選択でとっさに結界を張ったが、あまり長くは持たないだろう。

追い詰められてしまった。

だけどそんな時でも僕は聞かずに居られなかった。

「どうして僕をかばったんだ」

白梟は自分の命も顧みずに僕をかばった。その結果致命傷を受けてしまった。おそらくはもう余命幾ばくもない、体色を変化させ隠れていたヤモリの事も気付いていたようだし、おそらく自分一人だけだったらこの洞窟も脱出できたかもしれない。

思えば最初に会った時からそうだ、わざわざ危険を告げるために僕の前に現れ地面が崩落して洞窟に落ちていった時もわざわざついてきてくれた。そんな義理などないはずなのに、放っておいてもいいはずなのに、この洞窟の中が危険だとわかっていただろうに、なに何故なんだ。

「似ていたんだ」

白梟が息も堪え堪えに語り始めた。それは白梟が語る懐かしき過去の思い出。

「もう三百年も前の事だ。その時にはすでに私は、長き時を生き妖あやかしへと変わる寸前だった。しかし、強力な妖怪に襲われてしまった。逃げる事は出来たが、深く傷つきもうだめかと思ったその時だった、通りがかりの侍が私を治療し助けてくれたのは。彼は言った、ここには人を苦しめ災いをまき散らす妖怪がいると聞き退治してやろうと来たと。それは私を傷つけた妖怪であると気づき、危険だと私は彼に思いとどまるように告げたのだが受け入れてもらえず、結局彼は妖怪に逆に殺されてしまった。それからしばらくして妖怪はとある侍に打ち倒され道士が洞窟の中に封印した。私は道士に頼み、この山の番人にしてくれと頼んだ。私を助けてくれて、そして何のお礼をすることも出来ずにその命を散らしてしまった侍に対するせめものの恩返しだった。少年は、あの男に何処か似ていた。だから放っておけなかった。しかし、私の役目もう終わりのようだ」

言葉を紡ぎ終わると白梟は嘴から血を吐き出す。

自分を助けてくれた人が殺され、何もできなかったからせめて、見張り続けようと永き時を生き、今その命が終ろうとしている、僕はその時白梟を何とかして生かしたいと思った。

まず僕自身が命を助けられたその借りを返したいし、それにただ見張りを続けるだけの人生？（鳥生？）を送った白梟はもう十分責務を果たしてきた、今度は違う道を生きてみて欲しいとも思ったからだ。

「なあ、式神になるつもりはないか」

深く傷つきもうすぐ命を失いかけている白梟だが、僕の式神となり生まれ変われば、賭けではあるが生き残れる可能性があるはずだと、

僕はそう告げた。

「僕と一緒に生き、僕に力を貸してくれ」

僕の懇願に、白梟は苦しみながらも笑った。

「それもいいかもしれないな」

了承を得た僕は、親指に切り傷を造ると白梟に飲ませた。

「其は我が盟友、其は我が道を導くもの其は白き眼、その名は『白蓮^{れん}』」

転身の術を受け、僕の霊力が白梟、いや、白蓮の中に注ぎこまれる。霊力の光に包まれ、そして消えるとそこには生まれ変わった白蓮の姿があった。

式神となり傷が癒え、姿は変わらず白い梟のままに呪帯を体に巻きつけている。

「これからもよろしく頼む」

「私の方こそな、主殿」

誓いはここに為された、さあ共にここを出よう。

「白蓮・眼式」

白蓮がその姿を変え、現れたのは片眼鏡^{モノクル}、宙に浮かぶそれが僕の右目の前に固定される。

「少し待っててね、冥子ちゃん」

未だ眠る冥子ちゃんの頭を軽くなでると、僕は結界から飛び出した。同時に僕に気付いたヤモリが舌の一撃を放つが、それを僕が避けるとすぐさままた体色を変化させて隠れる。

だが、今の僕には以前まで見えなかったものが見える。

白蓮・眼式は幻術などを無効化しあらゆるものを見抜く力を持っている。

ヤモリの陰業は体色を変化させているのではなく、ごく薄い霊波を全身に纏いその色を周りに同化させていることもわかった、だから。

「お前の姿は、今やもう丸見えだ！黒陽・槌式！」

僕は槌を持つと一気に駆けより、自分の居場所がまだばれていないと思っっているヤモリを全力でぶっ叩いた。

ガンと殴り飛ばされた、ヤモリは吹っ飛んだ勢いそのままに壁をぶち破り、その先にあっただけらしい空間にまで飛んでいった。

「貴様も僕が封印してやろう！」

一気にとどめを刺してやろうと、僕もその先の空間に入り込むと僕はそこで目を疑った。

ヤモリが宙に浮いている。いや違う、何か巨大なものが喰らいついている。

かなり広い大部屋に、それは全長三十メートルはあろうかという大百足。

（そんな、封印が破れてしまったというのか！）

あまりの事に驚いていると突然、モノクルになっている白蓮が僕の頭に直接話しかける。

「あれが封印されていた妖怪なのか」

見れば奥には祭壇があり、そのすぐそばにはお札の貼られた丸い石の玉が割れて落ちていた。壁が壊れた衝撃かそれともさっきの地震のせいか、どちらにしても封印は壊れてしまったようだ。

それにしてもなんという巨体、そして妖力。まずい、殺される。その時の僕の頭にははつきりと自分の死のイメージが生まれていた。どうすればいい、せめて冥子ちゃんだけは助けたい。

「グギヤアアアアアアアアアー——」

ああついには、ヤモリは胴体を真つ二つにされると、断末魔の声を上げ絶命した。

するとすぐさま、こつちを見た。

逃げるなんて間違はなく無理だ、戦っても殺される。

だが、それでも戦わなくてはならない。恐怖で勝手に足が震える、怖い。

でも僕には今、守るべき人がいる。

その事実が僕にかすかな勇気を与えた。

彼女は死なせない、そして僕も生きて見せる。

正対して黒陽を構えると、同時に突っ込んでくる大百足。その凄まじい突進をかりうじて避けると、黒陽を叩きこむが、ガキンと簡単にはじかれた。

「効かないだと」

さらに絶望的だ。

そしてさらに続けざまに放たれた突進を黒陽で受けるが、圧倒的力

の差で吹き飛ばされて地面にたたきつけられた。

「グハッ」

吐き出される血の塊、一瞬に意識が遠くなった。

（立つんだ、主殿）

白蓮の呼びかけに、何とか体を動かそうとするが思うように動かない。

そんな僕に大百足は鋭い二本の牙をガチガチとやると、僕に喰らいつこうとした。

やられる！僕は思わず目を閉じてしまう、その時だった。

ヒュンと何かを切る音と、大百足の悲鳴が響いたのは。

そこには矢が突き刺さっている大百足の姿。

「早くこっちに来なさい、逃げるわよ」

誰かが叫んだ、見るとそこにいたのは今はなったであろう霊対ボーンを構えた美神美知恵と唐巢神父の姿。

救助が来たのか、思わず喜びが顔に浮かびすぐにも駆け寄りたかったが、その前に連れてこなくちゃならない子がいる。

「待ってください。まだ冥子ちゃんがいるんです。今連れてきます」

傷ついた体に鞭打ち立ち上がると、美神さん達とは逆方向にある壊れた壁に向かう。

「待ちなさい、危険よ！私達に任せなさい」

美神さん達の引き止める声も背に、僕は走りだした。

冥子ちゃんは結界の中でまだ寝ていた。本当によく起きないものだ。おんぶして担ぎあげると、美神さん達のところへ行くために壁の穴を抜けるが、そこは戦場だった。

「父と子と精霊の御名に置いて我に力を貸したまえ、アーメン」

自然界からエネルギーを借りた唐巢神父がそれをエネルギー波にして放ち、美神さんも霊対ボーガンをさらに突き刺すが戦況は芳しくない、大百足はまるでダメージが無いかのように動き回り、襲いかかる。

「これじゃあ近づけない」

大百足はちょうど、僕達と美神さん達を分断する様な位置にいて向こう側に行くにはその横をすり抜けるしかない。だが、はっきり言ってそれは無謀な考えだ。

美神さん達は僕達がいるのに気付いたようだが、僕達の方に向かう余裕はなく、僕達から行けば間違いないと気付かれるだろう、そして素早い動きで食らいつかれる。

岩などの物陰に隠れて少し考えたが、こうするしかないか手はないと思う。まずは冥子ちゃんを助けてもらう、僕だけだったら少しはもつ。

冥子ちゃんを岩陰に隠すと、意を決して飛び出した。

「おい、こっちだ！こっちにこい大百足！」

おとりになる事、それが僕の思いついた策。いや、策ともいえない危険な行為だ、それでも僕はやるしかないと思った。

大百足は僕の存在に気付くと、首を伸ばし僕を殺そうとやってくる。

「美神さん、唐巢神父、冥子ちゃんを頼みます！」

迫り来る顎を回避して頼むと、すぐさま唐巢神父が駆け出し冥子ちゃんを回収する。

よし、とそう思ったら。大百足が冥子ちゃんとそれを抱えている唐巢神父に気付いた。

「灰怒・爆式^{はいくしき}」

さらに意識を僕に向けさせるために、僕は式神灰怒・爆式を投げつけた。

能力は文字道理爆弾、霊波をまき散らしその衝撃波を叩きつける。

「グギャアアアアアア」

これは結構効いたようで、今までにない悲鳴を上げると僕を睨む。表情なんてわからないが、あれは明らかに怒っている。

「逃げて！」

美神さんが叫ぶ。言われずとも、そうする。僕は回り込むように走るが、百足は尾を振りまわし行く手を遮る。逃がす気はないようだ。灰児・煙式の煙玉を使いたい、まだ再生していない。

黒陽・槌式は効かなかった。白蓮・眼式は戦闘用じゃないし、今だって装着したままにしているから、視力も強化されて大百足の攻撃を避けられているんだ。

残るは灰音の音式^{おんしき}。能力は音爆弾、三半規管を狂わす強烈な音を発生させる。

これをぶつけければ、なんとか行けるかも知れない。

「灰音・音式」

影から音爆弾と化した灰音が飛び出る。僕はそれを掴むと、隙をうかがう。確実に当てなければならぬし、そしてチャンスは一度だけ。

手に汗握る現状、一瞬も気を抜いてはいけないうちに、危惧していたことが起きてしまった。

「フアアアゝア」

唐巢神父の背で目覚めてしまった冥子ちゃん、目をゴシゴシ擦るとおそらく認識できていない現状の中、その眼に移ったのは巨大な大百足の姿。

「きゃあああああああゝゝゝゝゝゝゝ、怖いゝゝゝゝゝゝゝ」

泣きだした冥子ちゃん。そして暴走、影から飛び出すマコラを除く十二神将。

やばい、間違いなく。

「か、唐巢神父っーーーーー！」

巻き込まれて吹っ飛ばされた唐巢神父、辺りかまわず暴れる十二神将。

唐巢神父には悪いが、これはチャンスかもしれない。大百足もこの騒ぎで僕からターゲットを変えたみたいだ、自分に向かう十二神将と戦うつもりらしい。

僕が駆け出す横で争いだす大百足と十二神将、大百足の吐く毒の液を龍の式神アジラが石化能力を持つ炎の息で打ち消し、イノシシの

式神ビカラの突進を大百足はその巨体で受け止め、一進一退の攻防を続けていた。

さすが十二神将は強力な式神だ。それを横目で見ながら僕は美神さんの元へたどり着いた。

「美神さん！」

僕の声に何処か啞然と戦いを見ていた美神さんははっと我に気付いた。

「こ、近衛君。・・・いい、ここで待ってなさい、すぐに冥子ちゃんを連れてくるから、そしたらこの洞窟から脱出するわよ」

美神さんは僕の肩を掴むと、そう命じるが、そういうわけにもいかない。

「美神さん、僕なら冥子ちゃんの暴走を止める事が出来ます。僕に手伝わせてください」

「駄目よ、あなたもうボロボロじゃない。ここはもう私達に任せて」
「僕が行かないと、冥子ちゃんは泣いたままなんです！早くしないと洞窟が崩れてみんな死んでしまいますよ」

大百足と十二神将が戦い始めてからずっと洞窟が揺れている。

美神さんは僕の言葉を受け止めると、わずかに迷いながらも認めてくれた。

「わかったわ」

「ありがとうございます」

「だけど、この洞窟から出たら、たっぷり説教だからね」

僕の額をコンと叩いた時の美神さんの顔は少し怖かった。

「行くわよ」

「はい！」

僕たちは一緒に冥子ちゃんに向かって走りだした。式神が何体か僕達にも向かってきたが、戦闘能力の高い式神はみんな大百足の方に向かっていたから残りを美神さんが防ぎ、僕は泣きじゃくる冥子ちゃんの前に来る事が出来た。

「うえーん、怖いよ、ゆーくーん、助けてー、どこにいるのー」

「ここにいるよ、冥子ちゃん」

僕は冥子ちゃんを両腕で強く抱きしめた。

「もう大丈夫、僕がついているから、ねっ、もう泣きやんで」

優しく声をかけ、右手で頭を撫でてあげると、グスリながらも徐々に泣きやんでいった。

人前でやるのは恥ずかしいが、強く抱きしめてあげて、僕の温もりが伝わると冥子ちゃんは自然と泣きやんでくれるんだ。

だが、冥子ちゃんは泣きやんだが、いい事ばかりじゃない。見ると大百足もかなりのダメージを受けたようだが、十二神将もまた影の中に戻ってしまいまだ健在だ。

「逃げるよ、君達」

ふっ飛ばされたがどうやら無事だったらしい唐巢神父が、いつの間にか僕達のもとに来ていた。
ガラガララッ、洞窟の崩壊が始まる。早く脱出しないといけないし

「や、やったー！」

思わず喜びの声を上げるが、グラグラとさらに揺れる洞窟。

「行くわよ」

美神さんの号令と共に走り出すみんな、大百足を交わし通路へ走るのが僕の足は止まっていた、大百足を見るとまだ息がある事が分かったからだ。

（封印するのか？）

白蓮が問いかける。

「ああ、駄目か？」

白蓮にとっては復讐の対象でもあるはずの大百足、それを封印して己の戦力にしようという僕の考えを拒絶するかとも思った。その時はあきらめるつもりだったが、白蓮の言葉は以外にもそれを認めるものだった。

（主殿の望むようにしてください。しかし、覚えておいてください。大百足を式神にする事が出来ればそれは主殿の大きな力となるでしょう、ですがそれは諸刃の剣です、主殿自身も傷つける刃となるかもしれませんご注意ください）

「・・・ああ、憶えとく。封魔の術」

掲げた札に大百足の巨体が吸い込まれ、その姿は消えていった。

「何をしてるの近衛君、早く来なさい！」

遠くで美神さんが僕を呼ぶ声を聞き、僕も脱出するために崩壊する洞窟を後に美神さん達の後を追いかけた。

洞窟から出ると、ほぼ同時といっているうちに中が埋まってしまう。

危なかったと、一息ついていると、光が辺りを指した。
見上げると太陽がもう上がり始めていた。

「ああ、もう朝か」

朝日の光と共に、僕の初めての冒険は終わった。

第四話（後書き）

やはり文が荒い気がする。

ヤモリじゃなくて素直にカメレオンにしておけばよかったかな？
目指せ式神百体？まだ未定。

第五話

暗い闇の中を僕は一人歩いていた。

何処まで行っても一筋の光すら見つけること出来ず、僕は歩みを止めた。

すると突然闇の中から、姿を現すものがいた。

三十メートルはあろうという長大な巨体、紅き甲殻、無数の足、二本の鋭い牙を持つそれは、大百足。

大百足は尾を振り上げると僕に巻きつけ縛り付ける。

身動きのとれなくなった僕に、大百足はその鋭い牙を持つ頭部を近づけ、こう命じた。

「貴様は私の贅になれ。怒りを憎しみを狂気を我に捧げよ」

「い、いやだ、離れろー!」

拒絶し暴れるが、振りほどく事の出来ない力の差。

「血を求めろ、惨劇を起こせ、あらゆる負の限りを尽くせ。しかれば我が力貴様の魂と引き換えに与えよう」

そういうと大百足は、頭から僕の胸の中に入っていくその姿を消していった。

「う、うわあああああああああああああー」

絶叫と共に僕は目覚めた。

「はあー、はあー、はあー」

荒く乱れた呼吸、流れ出る汗、心臓に手をやると激しく鼓動している。

あの林間学校の洞窟からすでに半年が立っている。

最近はいつもこの夢を見る。最終的に僕が封印した大百足、まだ式神にはせず札に封じたままだ。

今僕は、あの美神美知恵さんに師事している。半年前洞窟から帰った後、旅館で待っていた冥菜さんと、美神さんと唐巢神父にこっぴどく叱られた上、何で勝手に山に行ったかとか、僕の術に関してもいろいろと白状させられた。もっとも術の根幹となるべき場所はさすがに言わなかったがそれで激しい追及と説教で心神喪失していると、そのあと三人は何かを話し合い、監視の意味も込めて僕を弟子にして、霊能力者としての常識や基礎的な事などをもうバカな事をしないように教え込むという事になったそうだ。

で、僕の師匠になったのが美神美知恵さん。

今まで自己鍛錬でかなりやっていたつもりだけど、美神さんのはまさしくスパルタで、何とかギリギリ体が持っているという感じでかなりきつい。

今日も今日で学校が終わったら、美神さんの所で厳しい修行だ。最近冥子ちゃんに会う機会が減ったが大丈夫かが少し心配だ。

教科書などを鞆に詰め込むと、僕は引き出しから一枚の札を取り出す。その中には大百足が封じられている、・・・夢の事はまだ誰にも言っていない、大百足を封じている事もみんな知らない、洞窟が崩落し多分死んだと思っているだろう。

大百足は、強力で恐ろしい存在だ。僕を惑わし逆に操ろうとする。今はまだ無理だが僕はいつの日か必ずや大百足を調伏し、己の力に見せる！自分に誓うと、札を懷の中に収めた。

「おはよう、母さん」

キッチンで朝ご飯を作っている母さんに挨拶を交わすと席について待つ。

「特訓の方はどう？大丈夫、体には気をつけてね」

食事をしていると母さんが話しかけてきた。

母さんはいつも僕の身を案じ心配してくれるし、僕がやりたいと思う事に理解も示してくれる。

でも、正直に言って母さんは僕に霊能力者の道を歩いてほしくないようなんだ。

理由はなんとなくわかる。

元夫が霊能に関わっていて、それには直接的には関係ないが没落していった。

根本的に霊能に關していい感情を持っていない。

それでも僕の人生は僕のものだとすきにさせてくれている。

「大丈夫だよ母さん、確かに厳しいものがあるけど、結構充実してるよ」

「そう、頑張ってるね。母さん、応援してるわ」

「うん」

ご飯も食べ終わると鞆を担ぎ僕は家を出ていった。

小学校なんてあまり行く必要性もないんだが、今の僕はまだ九歳、世間体というものがある。

大学に行くかはまだ考えていないが、高校まではちゃんと出ようと思う。

一日の授業も終わり放課後になると、僕はビル内の一室にしつらえられた事務所の中に入る。美神除霊事務所、所長の美神さん一人で

切り盛りされているが、その実力は高く彼女に依頼するものも多い。普段ここにいるのは、美神さんとやってくる依頼主と最近は僕ぐらいたが、今日はどうやら一人多いようだ、美神さんの一人娘で令子ちゃん十二歳。霊力には目覚めているがまだ特に霊能力者としての修行はしていないらしい。

「お邪魔します美神さん、こんにちは令子ちゃん」

「ええ、いらっしゃい近衛君」

「・・・来なくていいのに」

「こら、令子」

どうも令子ちゃんは美神さんに教えを受けている僕に対して、対抗心が嫉妬心を感じているようだ。どうしたもんか、思わず苦笑いが浮き出してしまうよ。

「ちょっと、何笑っているの」

おっと、怒られてしまった。

「あーごめん。で、美神さん今日は一体何を」

オカルトに関しての勉強かそれとも実技か？今日のメニューをまだ聞いていないから何をするのかまだ分からない。

「ごめんね近衛君、今日は突然仕事が入っちゃって、これから現場に向かうの。だから今日の授業は無し、ゆっくり休んでくれる」

仕事と重なると、その日の授業は無くなる。

僕も除霊助手として共に現場に行きたいのだが、それは認められない。

まだ九歳という年齢の事もあるし、以前の林間学校での無断行動のせいでもある。

まあ、仕方ないと言えば仕方ない。

「じゃあ、私は行くわね」

僕と令子ちゃんを事務所から出し、鍵をかけるとそのまま歩きだした。

「がんばってねーママー」

令子ちゃんの応援に振り向き笑いながら手を振りながら去っていった。

後に残ったのは僕と令子ちゃん。

僕もここでやる事が無いんだったら他の所へと行くことにしよう。

「ちょっと待ちなさい」

と、思ったんだが、令子ちゃんに呼び止められた。

「なにか用かい？」

すると令子ちゃんはビシッと僕に指を指した。

「あんたなんかママの弟子だなんて認めないからね！」

そう言い残すと、令子ちゃんは振り返りそのまま走って帰ってしまった。

「さすが、気の強い子だな」

もう詳しくはあんまり覚えていないが、原作でもそんな人物だった気がする。

結局その日は、ちょっとひさしぶりに冥子ちゃんの所によって一緒に遊んでいた。

第五話（後書き）

最初にGS美神の二次小説を考える際、本当はオリ主転生ではなく、鬼道政樹憑依ものを考えていました。

夜叉丸をひたすら強化して、なぜか女体化させた上でヒロインにしようかと考えていたんですが結局今の形にしました。

今回は幕間的なもの、封印したはずの大百足の脅威と美神令子との面識について。

第六話

平和な時間というものは、ふと突然無くなってしまうものだ。僕も、もう十歳になったある日。

その男達は突然僕の家に来て来た。

僕の実の父と兄、鬼道家当主、鬼道政次つぐと鬼道政樹まさき。

「何の用」

剣呑な気配を出しつつも母さんが尋ねた。

「話がある」

「私にはないわ帰って」

母が拒絶の意を示すが、そこに割って入ったのは兄、鬼道政樹。

「まあまあ母さん、話くらい聞いてくれても構わへんやないか」

母さんは兄さんの言葉に、仕方ないとため息を吐くと、話くらいはと聞く事にしたようだ。

「わかったわ上がってちょうだい。幽樹、あなたは少し出かけて来なさい」

僕とはあまり会わせたくないのか、出かける事を要請する。

「あ、ほんなら僕も一緒に行くわ、幽樹ひさしぶりに兄弟で話し合おうや」

僕の靈感が残った方がいいという気持ちになったが、兄さんに背を押されると僕はそのまま一緒に出かけることになった。

それが間違いだった事にも気付かずに、自分の靈感を信じ残っていたればよかった、そうすれば何とかなったのかもしれないのに。後悔はいつだって先に立つことはない。

「くらいっ」

兄さんが右手に構えた銃を打ち放ち、次々とわき上がるゾンビたちを打ち貫く。

だがしかしかなりの数があるゾンビに対しほとんど扱った事もない銃では命中率も低く、外れる事が多く、ついにはリロードが終わる前にかみつかれると、兄さんは命を失った。

それと同時に現れるコンティニューの文字とカウントダウンを示す十の数字。

そう、これはゲームだ。ゾンビ・バスターという名のシューティングゲーム。

僕たちは今、ゲームセンターに来ている。

修行漬けの毎日で兄さんはこういう事に免疫が少なく、新鮮な表情で楽しげにエンジョイしていた。

それを横目に見ながら僕は思った。

一体何をしに来たんだろうか？

金が無くて借金の無心に来たのだろうか、はっきり言ってあまり聞きたくない話だな。

「いやーこれって、初めてやったけど結構楽しいわー」

ゲームをやり終えたのだろう兄さんが笑いながら僕のほうに歩いてきた。

兄さんには知らされていないのかもしれないけど、やっぱり直接聞

いた方がいいよな。

「兄さん、場所を変えないか」

「いいけど、どないしたんや？」

まだ少し遊び足りなそうにしてたけど、僕が頼むと了承してくれた。遊んでいるうちに大分時間が立ってしまったのか、僕が兄さんを連れて公園にたどり着く頃には、もう夕陽が沈み始めていた。

沈黙のまま、共にベンチに腰掛けると、話を先に切り出したのは政樹兄さんの方だった。

「びっくりしてるやろな、悪いないきなり来て」

ああ、驚いたよ。休みなく修行漬けの毎日を送っているのかと思っ
た。

「今日はな、実はお前に用があって来たんや」

「・・・えっ」

予想していた母さんへの金の無心に来たのかと思っていたが、僕に
用事？ 一体何なんだろう。じゃあ、母さん達は何を話しているんだ。

「幽樹、お前GSを目指しているってそう聞いたで」

「・・・ああ、そうだけど」

何で知っているんだ？ 母さん達が別れてから、一回たりともあって
いないのに。

「でな、GSを目指し取るんやったら、どうや、僕と父さんと一緒
に行かないか。鬼道家は、まあちよつと今は落ちぶれてしもうてる

けど、長い年月を持つ陰陽師の家系や、一緒に修行して強くなろうやないか。そして、そして……」

「そして六道家に目に物見せてやろうという事かい兄さん」

息詰まる兄さん。六道家に対する戦力として僕も使おうということか、父さんの考えかな、でもこれに乗るつもりはないな。

「僕は行かないよ兄さん、僕には僕の道がある」

「なんでやっ、六道家のせいやないか！父さんの会社がつぶれたのも、父さんと母さんが離婚したのも、僕達が離れ離れになってしまったのも全部六道家が悪いのにつ」

断られると話思っていなかったのか、僕の拒絶の言葉を受けると。兄さんは激昂して恨みつらみを声を荒げて叫ぶ。

「兄さん、それは責任転嫁だよ。会社がつぶれたのも、母さん達が別れたのも、すべて自業自得としか言いようがない。……話がそれだけだというんなら、僕はもう行くよ。家に帰る。そうだ、ご飯ぐらいは今日うちで食べないかい。ちょうど今日の晩ご飯は兄さんの好物だよ」

帰るために歩き出し、途中いい考えだと思い振り返り兄さんを食事に誘うと、顔を地面に背けて沈黙している兄さんがいた。

「……兄さん」

僕の呼びかけにガバツと顔を上げると、そこには僕を睨みつける兄さんの姿がそこにはあった。

「残念だよ幽樹。できれば自分の意思で一緒に来てほしかった。だ

けど僕の誘いを断るんやったら仕方ないわ。…ッ、夜叉丸！」

突如として兄さんの影から飛び出るのは、鬼道家に代々伝わる式神夜叉丸。

「どういふつもりだい、兄さん」

いや、本当はわかっている。説得が駄目なら力づくで、とそういう事だ。

「無理矢理にでも一緒に来てもらうで、六道家をぶっ潰すためにお前の力も使わせてもらうわ」

言葉と共に走り出すのは夜叉丸、僕はそれをどこか冷めた目で見ていた。

六道家への復讐の為に実の弟にも手を出すか、僕も残念だよ兄さん。

「出る、黒陽」

影から飛び出した蛇にも似た式神黒陽が夜叉丸の繰り出す拳を堅い槌にも似た頭部で受け止める。

「…っ、お前も式神をもっとったんやな幽樹。でも、そんな式神で夜叉丸に勝てると思うんやない」

続けざまに放たれる連撃に黒陽は受け止めきれずに殴り飛ばされる。だが、そうなる事は呼んでいる。

家系は落ちぶれていても、夜叉丸自体は十二神将と同じくらい長い歴史を持つ優秀な式神だ。

でも、使い手はどうか。

「灰兒・煙式」

影から飛び出た煙玉が爆発し辺りに大量の煙をまき散らす、僕も兄さんも視界を失うが。

「白蓮・眼式」

モノクルを装着した僕の右目は、その中であつても周りをクリアに見る事が出来る。

僕は視界を失い、指令が与えられずに棒立ちしている夜叉丸を横目に放っておくと、さらに式神を呼び出す。

「灰音・音式」

僕はそれを掴むと、兄さんに向かって投げ込む。

[illegible]

「ぐあつ」

辺りに響く強烈な音爆弾、兄さんの叫び声が聞こえ煙も晴れるとそこには倒れ込み動けなくなった兄さんの姿があった。

「く、くそっ」

起き上がろうとするが、そのたびに体がふらつき倒れ込む。

「無駄だよ兄さん。今のあんたは三半規管が狂い、立つ事も満足にできないはずだ、時間が立てば治るだろうから、僕はもう行くよ」

「ま、待つんや幽樹」

兄さんの引きとめる声も無視して僕はその場を去った。

「やれやれ、すっかり時間が立ってしまったな」

日は沈み辺りはすでに夜の帳が落ちている。街灯と家屋の光を頼りに己の家に向かったの帰路を歩いていた。

ふっ、思わずため息が出てしまう。

気が重い、復讐の手伝いなんて御免だが、正当防衛とはいえ兄さんを拒絶した上でさらに倒してしまった。気分が悪い。

「ん、家の電気がついていない。どうしたんだろう？ 出かけているのかな」

もう暗いというのに電灯がつけられていない我が家、父さんと出かけたのか？ いやそれはないか、こんな時間だしもう帰っているだろうな。

ガチャリ。

ドアノブに手をかけるとそのまま引っ張る。ドアには鍵は掛けられていなかった。

「不用心だな、母さん」

出かけるときはいつも鍵をかけているはずなのに、父さんがやってきて動揺でもしてたのかな。

とりあえずパチリと玄関の電灯のスイッチを入れて奥に入る。

テレビでも見ようかと居間の電灯も付けるとそこには……。

「えっ」

そこには倒れ伏して血を流す母さんの姿があった。

「か、かあさん」

あわてて近づき抱き上げるが、母さんはもう息をしていなかった。

「どうして、誰がこんな事を」

いや、疑わしいのが一人いる。

鬼道政次。

それしか思いつかなかった。

「お、おのれえええええー、よくも、よくも母さんをつ」

僕は母さんを丁寧に布団に横たえると、家を飛び出した。

向かう先は公園、鬼道政次とつながりを持つ兄さん、いや鬼道政樹を確保するため。

だがもうそこには鬼道政樹の姿はなかった。既にダメージも癒えて鬼道政次と合流したか。

「くそっ！っ白蓮」

影から飛び出るのは、呪帯をまいた白き梟。

「白蓮！まだ遠くには行っていないはずだ、探せ！」

白蓮はうなずくとそのまま旋回し夜の空に飛び上がった。

搜索はほどなく成功し、白蓮はその眼に鬼道政樹そして鬼道政次の姿を捉えた。

だがすでにその姿は遠い、白蓮と視界を共有している僕には見えて
いる。

二人は車に乗り込み、今走り出した。

逃がすわけにはいかない、なんとしても捕まえなければならぬ。
そして自分が何をしたか思い知らせてやる。

その意思が僕の胸を奔るが、だがどうすればいい。相手は車だ、走
って追いつけるわけもない。

あきらめなければならぬのか、殺人事件、警察に任せなければな
らないのか、でも、僕自身の手で。

その時、僕の願いに応える声が唐突に頭の中に響いた。

（その怒りに我が応えてやろう、その憎しみを我が晴らしてやろう、
捧げよ、なれば我が力を貴様にくれてやる。応えよ、その意思を）

その声は幾度となく僕の夢に現れる大百足の声。それは所謂、悪魔
の誘いというものと変わるものではないだろう。だが、それでも僕
は。

（いけない、主殿。それはあなたを狂気へと引きずり込む、その誘
いには乗ってはいけない）

今まさに鬼道親子を追跡している白蓮が、僕の意識に語りかけ止め
ようとするが、すまない。

それでも許せないものがある。

懷から抜き出すのは封じられた大百足の札。

指を噛み切り流れ落ちる血を札に押しつける。

「其は我が下僕、其は我が怒りの担い手其は朱き刃鎧、その名は『
朱里』」

転身の術と同時に血のように朱き閃光が札から出て、濃密な妖気が辺りに充満する。

現れたのは大百足、三十メートルもある巨体にそれに似合う大きさの全てを噛みちぎるような牙、無数にある足は鎌のように鋭い刃に変化した強力ですそれでいて危険な新しい式神が僕の前に現れた。

「朱里・鎧式^{がいしき}」

次の瞬間装甲の術の言霊を受けて、式神朱里はその姿を僕にまとりつくように姿を変え、それは籠手となり、具足となり兜になり鎧となり、まるで戦国の武士のような姿になって僕の全身を包んだ。

「う、うおおおおおおおおお——————————」

自分でも意味もわからずに出た雄叫びと共に、朱里・鎧式を纏った僕はこの夜の空に跳びだした。

目指す目標は、今もつながる白蓮の眼に映り続ける鬼道親子。

そうだ、決して逃さない。

第六話（後書き）

もともと気が向いた時に書いているとう感じだったが、最近仕事が忙しく執筆時間があまりとれなくなってきた。

たぶん更新は大分間隔をあけてしまうようになってしまったと思う。まあゆっくりやろうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9118n/>

式神武装使いの転生記

2010年10月17日18時54分発行